

中口原油パイプライン、ロシア側敷設完了で、稼動開始に向け準備進展

(財) 日本エネルギー経済研究所
理事 戦略・産業ユニット総括
小山 堅

8 月 29 日、ロシアと中国を結ぶ原油パイプラインのロシア側区間での敷設工事が完了し、プーチン首相出席の下で稼動セレモニーが開催された。今回、工事が完了した部分は、ロシアのスコボロジノ（アムール州）と中国の大慶（黒龍江省）を結ぶ全長約 1000km のパイプラインのうち、ロシア側から中国国境までの約 70km の部分であり、中国側での建設工事も同時並行的に進められている。中国側区間の工事も年内には完了し、本パイプラインでの大慶向け原油輸出の稼動開始が期待されている。

このパイプラインは、「東シベリア・太平洋パイプライン (East Siberia Pacific Ocean oil pipeline: ESPO)」と呼ばれる巨大プロジェクトの一環である。ESPO の第 1 フェーズは、2004 年末にロシア政府が建設を承認、2006 年 4 月に工事が開始されたもので、ロシアにとってフロンティア地域である東シベリアの油田を開発し、起点・タイシュット（イルクーツク州）から、太平洋岸まで輸送能力 3000 万トン/年（60 万 B/D）の原油パイプライン（総延長約 4600km）を建設するプロジェクトである。2009 年 10 月には、タイシュットからスコボロジノまでの区間の建設が完了、2009 年 12 月には、太平洋岸のコズミノに石油輸出ターミナルが建設され、アジア市場向けの原油輸出が開始されていた。

中口間では、既に鉄道輸送を通して、原油貿易が実施されており、2009 年実績を見ると中国のロシア原油輸入量は 1530 万トン、中国にとってロシアは、サウジアラビア、イラン、アンゴラに次ぐ第 4 位の原油輸入相手国となっている。しかし、冒頭で述べた今回のパイプライン建設（ロシア側部分）の完成は、いわゆる ESPO の「中国支線」となるもので、ロシア（の東シベリア油田）と中国をパイプラインで直結するものとなる。「本線」と位置付けられているスコボロジノから太平洋岸（コズミノ）までのパイプラインはまだ存在せず、構想として打ち出されている ESPO 第 2 フェーズの能力拡張計画（3000 万トン/年から 8000 万トン/年まで増強）の実現には、まだ多くの課題や不確実性が存在している中、本件は実際にプロジェクトとして、着々と実現していることが注目される。

今回の「中国支線」の稼動開始に向けた動きを中心に、ESPO 全体ひいてはロシア・東シベリアの石油開発はどのような意義や重要性を持つのか。以下では、その点について、ロシア、中国、そして国際エネルギー市場およびわが国を始めとするアジアエネルギー市場、という観点から整理してみたい。

まず、ロシアにとって、「中国支線」の建設は、中口間の石油貿易の拡大と密接化を通し

て、両国間の経済関係強化につながるものであり、かつ、①拡大する中国エネルギー市場へのアクセス強化、②これまで欧州主体であった石油輸出先の多様化、③フロンティア地域である東シベリア地域の経済開発の促進、など多くのメリットを生み出す端緒となることが期待されるものであろう。昨年末のコズミノでの石油輸出開始の際と同様、今回の稼働セレモニーにもプーチン首相が出席し、その「門出」を祝していることからロシア側が本件を重視する姿勢が示されている。

他方、石油需要が大幅に拡大し続け、輸入依存度が高まっている中国にとっても、本案件は大きな意義がある。ロシア側と同様に、エネルギー協力を通じた二国間関係の強化という総括的な意義に加え、①地理的に近接するロシア・東シベリアからの大規模なエネルギー供給確保、②中東依存度引下げなど、エネルギー輸入源の多様化、などの効果が期待できるからである。加えて、CNPC など中国の国有石油企業が東シベリアを含めロシアのエネルギー資源開発に参画する契機となることもありえよう。

このように、両国にとって、本案件は重要な意義を持つものであり、その点が両国政府に十分に認識されているからこそ、「中国支線」先行建設が進み、今日に至ったといえよう。また、金融危機後にロシアの経済情勢が悪化し、エネルギー産業の経営状況が厳しい状況に陥った際、中国側が 2009 年 2 月にロシア（国営石油会社ロスネフチおよび石油輸送国営会社トランスネフチ）に対して 250 億ドルの融資を実施したことも、本件の推進を後押しすることになったのではないかと見られる。多くの専門家が指摘する通り、中ロ両国間には、安全保障上の観点等から相互不信や警戒感が残存しているという面もあり、単にエネルギー協力を通じた経済関係の密接化というだけでなく、アンビバレントな部分も存在しているように思われる。しかし、エネルギーを巡る利害関係の基礎部分において、双方がお互いを必要としている部分があることは間違いなく、その点からは、今後両国関係が一層深まっていく方向にあると見てよいであろう。

最後に、国際エネルギー市場への影響という観点に目を向けると、広く ESPO プロジェクト等を通して、ロシアのエネルギー資源開発がどう進んでいくか、という点が注目される。パイプラインというインフラの整備が資源開発の起爆剤になる例は北海の開発においても見られた。極めて豊富なエネルギー資源賦存が期待されている東シベリア（およびロシア極東など）の開発がインフラ整備と相俟ってどう進んでいくのか、という点は今後の中長期的な国際エネルギー需給バランスを見ていく上で重要な注目点の一つである。また、国際エネルギー市場において、最も注目される買手となっている中国のエネルギー調達への影響、という観点も大いに注目すべき点であろう。中国のロシアからのエネルギー輸入増大は、市場全体の需給バランスへの影響と共に、他の主要な供給国の輸出・市場戦略にも影響を及ぼしていくことになる。中国市場に熱い視線を送っている中東産油国などが対中市場戦略をどう展開していくか等は興味深い。この点、既に輸出を開始したコズミノでの ESPO 原油輸出が、サハリン原油の輸出拡大とも合わせて、アジア石油市場に需給環境・価格面で一定の影響を及ぼしつつあるとも考えられるようになってきていることに鑑み、ロシアによる中国を含む対アジアエネルギー貿易拡大の影響を今後も注意深く分析していく必要がある。

以上

お問合せ : report@tky.ieej.or.jp